

大会発表報告

子ども中心のライフストーリーワークに対する 職員の意識改革とその成果 ～若手職員へのアプローチを通して～

角之上遙 相川知美 徳原彩

国行桃香 阿部芳美 大塚愛子

(児童養護施設 東京育成園)

抄録： 当園ではLSWの取り組みについて、日常生活支援の中で「生き立ちの整理」や「成長の共有」という枠組みで支援を行っているものの、実際は職員間でLSWという言葉に馴染みがなく、個人の経験や感覚などの力量に頼った支援となっている。第4期アンケート調査を行った結果、LSWの取り組みができているにもかかわらず意識していないという職員の「認識の差」が明らかとなった。特に、若手職員は支援の中でLSWができていないと感じ、困り感を抱いている傾向が多いことがわかった。以上のことから、経験年数に関わらず、日常生活支援を実践するすべての職員が専門性の高いLSWを日常的かつ意図的に実践できるよう、第5期は「若手職員」に焦点を当てた調査や研究を進める方向に定めた。

キーワード：LSW、成育歴、子どもの自己形成

1.はじめに

LSWは、児童養護施設や里親など社会的養護のもとで育つ子どもを対象にイギリスで始まった。子どもが自分の過去や家族について知り、受け入れ、生活に適応できるよう支援することを目的としている。日本においても、「児童養護施設運営指針」（厚生労働省2012）によって、「子どもが自己の生き立ちを知ることは、自己形成の視点から重要であり、子どもの発達等に応じて、可能な限り事実を伝える」とすでに示されている。我々職員は子どもの最善の利益を考え、知る権利を保障するという側面からもLSWを実践することが求められていると言える。

その背景として、子どもたちの多くは保護や措置されるまでに生活環境や養育者の変化を経験しており、子どもの成長や人生の物語を知っている者との分離から、人生に空白の時間が生じている場合がある。その結果、施設で暮らす理由を理解していない子や措置の原因は自分にあると考える子、家族や生き立ちなどの情報を知らずに思い悩んでいる子も

少なくない。目の前の生活に目的や見通しを持ち、自分の人生を肯定的に捉えて生きるためにも、子どもたち自身が己のルーツを知り、振り返る手助けする“子どもの育ちをつなぐ援助”が必要とされる。

当園の現状としては、日常生活支援の中で「生い立ちの整理」や「成長の共有」という枠組みで支援を行っているものの、実際は職員間でLSWという言葉に馴染みがなく、個人の経験や感覚などの力量に頼った支援となっている。そこで第4期では職員全体に向けたアンケート調査を実施し、当園がこれまで実践してきた事例の収集と意識調査を行った。その結果、数々の事例に加え、LSWの取り組みができているにもかかわらず、それを意識していないという職員の「認識の差」が明らかとなった。特に、若手職員は支援の中でLSWができていないと感じ、困り感を抱いている傾向が多いことがわかった。以上のことから、経験年数に関わらず、日常生活支援を実践するすべての職員が専門性の高いLSWを日常的かつ意図的に実践できるよう、第5期では「若手職員」に焦点を当てた調査や研究を進める方向に定めた。

2. 研究方法

①若手職員にアプローチをするうえで必要なことの整理

- ・若手職員への意識調査や、何らかの取り組みによる意識変化を促すうえで、そのリスクについて管理職やアドバイザーも含めて考察する。

②若手職員を含めた職員へのアンケート調査の実施

- ・当園で「若手職員」とされる1、2年目と、チーム養育の基幹を担うホーム長や管理職を対象に、LSWに関する知識や理解、困り感を把握するためのアンケート調査を実施する。

③OJTの実施

- ・若手職員とホーム長以上を対象に、LSWの正しい理解と実践を促すためのOJTを実施する。また、OJT実施に向け、管理職やOJT担当と実施方法や講師、内容を検討する。

④LSWの実践と効果測定

- ・ホーム全体でLSWの取り組み一覧に沿った支援を一定期間意識的に実践する。測定と評価を通して、職員の意識変化と子どもへの効果を考察する。

3. 取り組みの成果（①のみ）

本研究は第4期より継続するものであるため、昨年度までの研究と、先行研究の論文（曾田氏、山本氏 榎原氏、才村氏）や書籍を参考に、改めてLSWとは何か、児童養護施設で生活する子どもにとって何故LSWが必要なのかという確認を行った。LSWとは社会的養護の下で生活をする子どもが、自分の人生を肯定的に捉えて主体的に生きる力を育むこ

とを目指すものである。それらを踏まえ、当グループでは、LSWを「また、子ども自身が生い立ちや家族のこと、これまでの成長、それらに対する感情を信頼できる大人と共に分かち合い整理することを通して、子どもの育ちや分断された歴史を繋ぐ援助である。」と定義づけた。

支援の中でLSWができていないと感じ、困り感を抱いている傾向が多い若手職員へのアプローチを通じ、職員の意識変化と子どもへの効果を考察することとした。しかし、若手職員へのアプローチを検討する中で、リスクとなり得ることが見えてきたため、管理職やアドバイザーからの助言を参考に改善案を講じた。

(若手職員にアプローチをするうえでのリスク⇒改善案)

- ・アンケート調査を実施し支援や意識の変化を促すことで、LSWの実践をすることに一生懸命になりチームでの支援が成り立たたず、子どもの利益が守られなくなるのではないか。

⇒職員の行動を変えたいのではなくて、既に取り組んでいるLSWに気付いてもらったり、日常生活支援の中にもLSWに繋がる支援が沢山あるという意識を持ってもらいたいということを知ってもらう。

- ・「若手職員」に焦点を当てた調査や研究を進めるが、当園ではLSWが体系化されていない中でどのようにサポート体制をとるか。

⇒チームでの支援の基幹を担うホーム長や管理職にもLSWとは何かを知ってもらえるよう働きかける。

4. 今後の課題

- ・LSWに関する知識や理解、困り感を図るためにどのようなアンケート内容が良いのか検討する。
- ・OJTの実施方法を検討する。
- ・子どもへの効果をどのように見るか検討する。

文献一覧

- ・厚生労働省(2012) 『児童養護施設運営指針』 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知
- ・才村眞理＆大阪ライフストーリー研究会(2016) 『今から学ぼう！ライフストーリーワーク 施設や里親宅で暮らす子供たちと行う実践マニュアル』 福村出版
- ・才村眞理(2009) 『生まれた家族から離れて暮らす子供たちのためのライフストーリーブック』 福村出版
- ・曾田里美(2017) 『児童養護施設におけるライフストーリーワーク実践の現状分析と推

進要員に関する研究』 関西学院大学大学院人間福祉研究科

- ・曾田里美(2018) 『児童養護施設におけるLSW実践の現状神戸女子大学健康福祉学部紀要』 vol. 10 p 35~45
- ・檜原真也(2010) 「児童養護施設におけるLSW-子供の歴史を繋ぎ、自己物語を紡いでいくための援助技法-」『大正大学大学院研究論集34巻』 p. 258-248
- ・森和子(2017) 『社会的養護にある子供へのライフストーリーワークの保障-英国における情報収集と記録の取り組みに焦点をあてて- 文京学院大学人間学部研究紀要 vol. 18』 p 25~35
- ・山本智佳央・檜原真也・徳永祥子他 (2015) 『LSW入門 社会的養護への導入・展開が分かる実践ガイド』 明石書店